

「『戦争責任告白』50周年」

2017年11月28日

「神奈川教区『第二次世界大戦における日本基督教団の責任についての告白（以下―戦責告白）』50周年を覚える記念集会」が23日（木）、紅葉坂教会で行われた。午前中の礼拝には出席できなかったが、午後の講演を聞きに行った。

私は戦責告白には深い思い入れがある。神学校を卒業した1967年に、東京教区の下谷教会の伝道師になった。この年のイースター（復活日）に、時の教団議長・鈴木正久牧師の名で、戦責告白が公にされた。鈴木牧師を招いて、東京の諸教会で、戦責告白問題を取り上げた集会が持たれ、喧々諤々の議論を聞くことができた。反対する人々は、「戦責告白によって、自分たちの戦時中の伝道がことごとく否定される」と言葉激しく主張していた。鈴木牧師は、戦時中の先輩たちの伝道活動を裁き、否定するものではない、先輩たちを父親のように思っているが、明日の教団を考え、キリストの教会になるために、戦責告白を出す必要があると、切れ味鋭い言葉で話された。神学生時代に通った教会の尊敬していた鈴木牧師の使命に燃えた信仰に心を打たれた。私の牧師の出発は、戦責告白を受け継ぎ、これを生きたことだと心に決めた。当時、靖国神社の国家護持法案が提起され、これに反対する運動に関わり、戦責告白は平和を実現するための精神的な支柱になっていった。

「50周年を覚える記念集会」の講演は、帝京科学大学の一色哲氏が「沖縄の戦後史からみた『戦責告白』とすれ違う“善意”―過去の反省から、未来の意思へ―」と題し、緻密なレジメを示しながら、話された。戦責告白の中の「わたくしども」は誰を指すのか、戦争責任は誰に対して負うのかという問いかけから話し始めた。そして、戦責告白は史料と事実に基づいた歴史的検証が十分でない、沖縄との関りが捉えられていないと言われた。

私も、戦責告白を重い問題として認識したのは、『日本基督教団史 資料集』を読んだ時である。『資料集』には、戦前、戦中、戦後の教団の資料が集められ、教団の歩みが克明に解析されている。戦時に向かう国家体制に追従していく事情を知った。例えば、「日本基督教団規則」の第七条の「生活綱領」の 一 は「皇国ノ道ニ從ヒテ信仰ニ徹シ各其ノ分ヲ尽シテ皇運ヲ扶翼シ奉ルベシ」。二は「誠実ニ教義ヲ奉ジ主日ヲ守リ公礼拝ニ与リ聖餐ニ陪シ教会ニ対スル義務ニ服スベシ」である。キリスト教信仰よりも天皇を崇める皇国史観の方を優先させている。教団は、戦争反対の声などはあり得ないことで、戦争に全面的に協力する体制に飲み込まれていった。その資料は諸々、歴然と残っている。

一色氏は、戦後の沖縄、奄美等の諸教会の事情を詳しく調べている。教団は、戦責告白を出し、翌年の1968年に沖縄キリスト教団との「合同」を果たした。戦時中、沖縄の教会は九州教区の沖縄支教区として、教団の教会であった。戦後、米国の施政権下に置かれた時、沖縄の教会との関りを、教団がアジア諸国に建てた教会と同じように切ってしまった。沖縄キリスト教団との合同は教団の“善意”であったろうが、沖縄から見ると「すれ違う」ものであった。一色氏は、戦後の沖縄キリスト教団史を踏まえ、合同に関わる議論などから、すれ違った事例を様々な事実から解き明かされた。知らなかったことが多く、苦悩の道を歩み続けた沖縄の教会には、本土の教会の無関心と無理解に対する怒りは深いものがある。安倍政権の沖縄への無知と理不尽な対応と似ていると言わざるを得ない。

一色氏は、戦責告白の実質化のために下記のように提言された。歴史的な実証研究が必要である。南西諸島の軍事基地化が進む中で、派生する様々な問題に対する関心を持ち、「地の塩」「世の光」になるとはどういうことなのかを求め続けることである。